

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：62618

研究種目：基盤研究(A) (海外学術調査)

研究期間：2012～2015

課題番号：24251010

研究課題名(和文) 海外連携による日本語学習者コーパスの構築 - 研究と構築の有機的な繋がりに基づいて -

研究課題名(英文) International corpus of Japanese as a second language-Focused on the corpus analysis and linguistic studies-

研究代表者

迫田 久美子 (SAKODA, KUMIKO)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究・情報センター・教授

研究者番号：80284131

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 36,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、従来の日本語学習者コーパスの問題点をふまえ、質的にも量的にも優れた発話・作文の日本語学習者コーパスを構築し、データに基づく日本語教育研究を行うことである。具体的には、(1) 国内外の研究協力者と共にデータ収集調査を実施し、母語と環境の観点による日本語学習者コーパスを構築する (2) データを分析し、日本語学や社会言語学的な観点から日本語の習得研究を行うことであった。

研究期間内で、(1)' 海外の12の異なる母語の日本語学習者と国内の環境の異なる日本語学習者計約1000人、日本語母語話者50人のデータを収集した (2)' 国内外の学会でデータに基づく成果発表を実施した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this study was (1) to build a learners' corpus of Japanese as a second language qualitatively and quantitatively superior to previous corpora and (2) to conduct acquisition studies focusing on Japanese linguistics and social linguistics with research colleagues.

During these past four years, (1)'we collected about 1,000 learners' data in 17 countries whose mother tongues are 12 different languages. The data contains classroom and naturalistic environment learners in Japan and also 50 native speakers of Japanese (2)' we analyzed the data and gave presentations at several conferences both domestic and international. With regard to acquisition studies the data revealed planning of time gives a positive influence to produce correct passive form, however it was not effective to correcting errors of intransitive and transitive verbs. Also the role-play data showed the importance of politeness compared to grammatical accuracy in speech communication with upper people.

研究分野：第二言語習得研究

キーワード：日本語学習者コーパス I-JAS 日本語習得 言語転移 第二言語習得 横断研究 教室環境学習者 自然環境学習者

1. 研究開始当初の背景

国際交流基金の2009年の調査では、海外の日本語学習者は3年前の2006年の298万人に比べ、22.5%増の365万人となり、教育機関数、教師数ともに増加の傾向を示している。それに呼応して、日英・日韓・日中の言語学的な対照研究が海外のジャーナルにも採択されるようになってきたが、日本語を対象とした第二言語習得研究や教育研究は依然として少ない。日本語習得研究・教育研究の遅れの一原因となっているのが、汎用性のある、まとまった日本語学習者コーパスの不在である。現状では、個々の研究者が自分の研究に見合った、非常に限られたデータベースを開発し、それをもとに研究を進めていて、他の研究者による検証や、研究成果に対して客観性のある判断を困難なものにしている。

日本語学習者のコーパス研究には多くの問題点があることもわかってきた。

- (1) 公開されている言語データも母語が限られ、長期の調査を要する縦断データが少ない
- (2) 記述方法が統一されておらず、誤用タグも付けられていないため、利用が困難である
- (3) 室指導や教材などの学習者情報が不十分なため、考察に限界がある
- (4) 客観的なレベル判定がなされていないため、コーパス間での比較ができない

2. 研究の目的

本研究は、1. の研究背景の問題点を検討しつつ、日本語学習者の言語データ収集とデータに基づいた課題研究を並行して行い、データの検証とその結果を反映したデータならびに電子コーパス化を行い、最終的には海外および国内で利用可能な汎用性の高い大規模な学習者コーパスを構築することを目的とする。

- (1) 学習者言語データを基盤として、海外の研究者と日本語学習者の文法習得の研究を行う。
- (2) 学習者言語データを基盤として、海外の研究者と指導と習得の関係に関する研究を行う。
- (3) 海外および国内において日本語学習者のデータを収集し、上記の研究から問題点を改善しつつ、国内だけでなく海外の研究者も利用できる学習者コーパスを構築する。

3. 研究の方法

【平成24年度(2012年度)】

平成24年度は、翌年から開始する調査の具体的なグランドプランの策定を行い、平成25年1月に共同研究者および海外研究協力者による合同会議とセミナーを開催した。具体的には、合同会議以外にコアメンバーによる打合せ会議、メールによる審議、調査実施者のための事前セミナーを行い、以下の調査内容を決定した。

事前調査: 調査対象者の日本語学習者の背景調査 (Face Sheet; FS の記入) をメールで送

受信 作文調査 (Mail & Essay) および作文調査のアンケート

本調査: 背景調査の確認 口頭調査
Story-telling 対話 Role-play
Story-writing 日本語能力調査 (SPOT パソコンによる聴解テスト)、J-CAT (パソコンによる聴解、読解中心の能力テスト)

上記の調査計画に基づき、言語類型論的に異なる12の言語 (英語、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、タイ語、ロシア語、ハンガリー語、ベトナム語、トルコ語、インドネシア語) の海外の日本語学習者および日本国内の教室環境と自然環境の学習者を対象として調査を開始することとした。事前調査として、韓国、台湾、日本国内において、上記の計画案を実施し、計画の細部の修正を行った。

【平成25年度(2013年度)】

平成25年度は、平成24年度に策定した海外調査のグランドプランに従って、高等教育機関の日本語学習者に対するデータ収集のための調査を実施した。具体的な調査概要は、以下のとおりである。

- (1) 7カ国の異なった言語を母語 (ロシア語、英語、ドイツ語、タイ語、インドネシア語、中国語、トルコ語) とする学習者に対する調査を10カ国・地域で実施し、473名のデータを収集した。
- (2) 調査は各学習者に対し、対面とパソコンによる日本語能力検査の2部で構成され、前半・後半各1.5時間をかけて実施した。
- (3) 日本からの調査実施者は、調査前に本調査のための事前研修を受け、機器の扱い方、日本語能力検査の進め方、また、対話やRole-playの進め方について、対応に差がないよう、統一した対応となることを心がけた。
- (4) また、対面調査の終了後は、各学習者の発話に関するコメントおよび今後の日本語学習のアドバイスを書面で与えた。さらに、同じタスクの話し言葉と書き言葉の習得傾向を分析し、国際シンポジウムのパネルディスカッションで成果を発表した。また、日本語学・社会言語学・第二言語習得研究などの多様な研究分野の研究者たちにより、学習者コーパス研究会を発足させ、コーパスに関する研究成果の発表および討議を行った。

【平成26年度(2014年度)】

平成26年度は、昨年度同様、高等教育機関の日本語学習者に対するデータ収集のための調査を実施した。また、国内の自然環境と教室環境の日本語学習者についても調査を行った。具体的な調査概要は、以下のとおりである。

- (1) 6カ国の異なった言語を母語 (ベトナム語・フランス語・韓国語・スペイン語・ハンガリー語・中国語) とする学習者の発

話・作文のコーパス構築のための調査を8カ国・地域（オーチミン市師範大学、グルノーブル第三大学、東国大学、高麗大学、コンテンプルセ大学、カーロリ・ガシュパール大学、湖南大学、台中科技大学）で実施し、約450名のデータを収集した。

- (2) 国内調査の場合、日本語学校と地域のボランティア教室の協力の下で、海外と同様の調査を実施した。
- (3) 収集したデータの一部を使って、海外研究協力者たちとの共同研究を進め、国際シンポジウム(ICJLE2014)、合同コーパス・シンポジウム、各研究会等で成果を発表した。
- (4) コーパス構築のために、文字化規則を検討し、公開までの文字化を第一段階～第三段階まで設定し、作業従事者(若手研究者)には事前研修を行った上で文字化作業を開始した。
- (5) 他分野(方言や歴史文献や母語話者)のコーパス研究者と合同でシンポジウムを開催した。

【平成27年度(2015年度)】

平成27年度は、科研の最終年度であるため、これまでの調査から個々のデータを整理し、不足する学習者データの追加調査、学習者データの書き起こしとコーパス構築の準備、そして学習者データを使った研究活動の3点のことがらを中心に活動した。

(1) 収集した学習者のデータから欠格条件のデータを除外した結果、予定数に満たないケースが出てきたため、一部の言語話者については、追加調査を実施した。さらに、国内の教室環境の学習者データ数を50名から100名に変更し、広島と東京の日本語学校や高等教育機関で追加調査を行った。

(2) 2015年度の最も大きな作業は、収集したデータの書き起こしであった。書き起こしの規定を決定し、日本語教育に関わっている院生や日本語教師を中心に書き起こしの作業員(アノテーター)を養成し、実施した。また、国立国語研究所の言語資源研究系の研究者の支援を得て、コーパスに検索システムを付与した。

(3) 収集したデータの一部を利用して、さまざまな研究を実施し、2014年に続き、2015年にはボルドーで開催されたヨーロッパ日本語教育学会(AJE2015)でパネルセッション発表、名古屋で開催された日本心理学会、そして国立国語研究所で開催されたNINJAL国際シンポジウムにおいて、パネルセッション、ポスター発表等成果を発表した。最終的に2016年5月9日、I-JASの第一次公開(学習者+日本語母語話者合計225名)を一般公開した。

4. 研究成果

「学習者のロールプレイに見られる話し手の依頼表現」(AJE発表, 2015年8月)

(1) はじめに 安全な誤用と危険な正用

本研究は、フランス語、スペイン語、英語、中国語を母語とする日本語学習者に対して行った依頼場面のロールプレイを分析し、同様のロールプレイを行った日本語母語話者と比較して、学習者の依頼の傾向を言語形式と機能の面から明らかにすることを目的とする。

日本語学習者は習得過程において、のようにさまざまな誤用を産出する。

中学校、短い、あのときのこと、覚えな
い、高校生、よく覚えた(中国・学生)
しかし、上記の誤用はそれぞれ、正用が推測でき、意味の理解や相手とのコミュニケーションに支障をきたさないという点では、安全な誤用と考える。一方、のような表現は、文法的には正しいけれども、聞き手が初対面の年上の教師の場合などには、聞き手に不快な印象を与えるため、危険な正用と考える。

教師：では、これから調査を始めます。

学習者：先生、よろしくね。

本研究は、日本語学習者の「依頼場面」のロールプレイの言語使用を分析し、日本語母語話者との相違点、問題点、及び母語の影響等について、検討する。

(2) 先行研究

1980年代、日本語学習者の文法の誤用や習得の研究が盛んになり、1990年代に入ると文法についてだけでなく、社会言語学や語用論などの観点からの習得研究も登場した。志村・生駒(1992)は、英語話者を対象に、英語と日本語(L2)で断り場面の表現を日本語母語話者の表現と比較し、L2(日本語)へのL1(英語)の pragmatic transfer を示した。具体的には、日本語母語話者は断り場面で代案を示したり、社会的地位が高い聞き手に対しては、「～ですが...」などの中途終了文(言いさし文)を使ったりするのに対し、日本語学習者は代案を示さず、また、社会的地位の高い相手に対しても、中途終了文を用いず、直接的に断る傾向があることを報告している。そして、これらは英語表現からの語用論の転移であると述べた。

鮫島(1998)は、中国語話者を対象に、初級・中級前期・中級後期の3つのレベルで、談話完成テストを用いて、依頼場面での言語表現の特徴を明らかにしている。その結果、依頼の言語形式は、の段階をふんで発達することを示している。

「～てください」「～くださいませんか」→「～いいですか」「～てもいいですか」→「～んですが...」「～ていただけませんか」

その上で、最初の段階の「～てください」のような直接的な言い方が中国語の影響を受けていると述べている。

猪崎(2000)は、フランス語話者の日本語学習者の依頼会話に見られる逸脱や不適切さについて、日本語母語話者と比較して研究している。例えば、日本語母語話者同士の会話では、予告部分(「実は、お願いしたいことがありますして...」)が依頼の前段階、あるいは導入部として存在するが、学習者の場合は、この予告部分がほとんど出現しない。また、「変更を申し出る」行為は、日本人は「お願い」「依頼」とみなしているのに対し、学習者は「交渉」と捉える傾向があり、そのためその直接的な発話が日本語母語話者には押しつけがましいという印象を与えてしまう。この原因として、言語背景を形成する社会・文化的な相違が影響していると考察している。

しかし、これまでの研究には、幾つかの問題点がある。

第1は調査データである。先行研究では猪崎(2000)以外、依頼場面の発話データではなく、談話完成テストの筆記データであるため、実際の言語使用と言えるかどうか疑問が残る。第2は、萩原(2012)の46名を除くと調査対象者の人数が多くない点である。志村・生駒(1992)はアメリカ人10名、猪崎(2000)はフランス人7名である。第3は、どの研究も同一母語話者のみを調査対象としている点である。調査対象者の母語の影響と判断するためには、他の言語体系の学習者の結果と比べて、異なった傾向が観察されることが必要である。

(3) 調査の概要

調査対象者

本研究の調査対象者は、海外で日本語を学ぶフランス語母語話者、スペイン語母語話者、中国語母語話者、英語母語話者、各15名、計60名である。日本語母語話者15名にも同様の調査を行ってデータ収集した。

学習者は、あらかじめ、SPOTとJ-CATの2つの日本語能力テストによってレベルを測定し、それらの点数を統計分析にかけ、日本語能力が等質レベルと判定された15名ずつを選出して母語別のグループを構成した。

調査内容

調査は、学習者と日本人母語話者(調査者)と1対1の対話によるロールプレイである。内容は、ロールカードに学習者の母語で次のように書かれている。

あなたは、日本料理店でアルバイトをしています。(中略)今は、一週間に三日アルバイトをしています。しかし、忙しくなってきたので、一週間に二日に変更したいと思っています。そこで、店長に言って、三日から二日に変えてもらうように頼んでください。(準備ができれば、教えてください。)

ロールカードを渡し、黙読後、内容が理解

できたかどうかを確認し、ロールプレイを開始する。日本人母語話者(調査者)が店長になり、学習者がアルバイトの学生になる。

分析対象

本研究では、前半の部分を3つのパートに分け、それぞれに焦点をあてて分析を行う。開始(A)(例「あー、ご相談があるんですが」)前提(B)(例「今、週三日働いているんですが」)依頼(C)(例「週二日に変更させていただきたいんですけども」)

また、それぞれの発話に使用された文を以下のように分類する。

言いさし (中途終了文 **中途**)

例 お話したいことがあるんですが・・・

質問文 (**質問**)

例 今、少しよろしいでしょうか？

平叙文 (**平叙**)

例 店長、話しがあります

(4) 調査結果と考察

開始(A)部

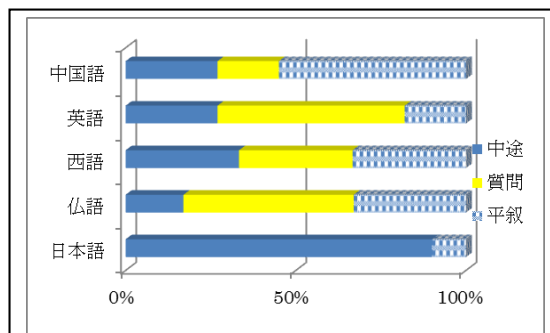


図1 開始(A)部の発話文の種類割合

図1の結果から、以下のことがわかった。

- 日本語母語話者は「言いさし(中途終了)」の文が多いのに対し、学習者は母語にかかわらず、その割合は極めて少ない。この点は、生駒・志村(1992)の結果を支持するものとなった。
- フランス語話者、スペイン語話者、英語話者は、「店長、今、ちょっと、いいでしょうか(仏・西・英)」など、呼びかけに相手の意向・都合を尋ねる質問文を使って相手への配慮を表す傾向があるが、中国語話者には見られなかった。
- 学習者は、日本語母語話者があまり使わない「お願いがあります(仏・西・英・中)」の平叙文を使う傾向があり、中国語話者にはその割合が高い。
- 日本語母語話者は、開始部でまず、「お時間をとってすみません」のように、自分の依頼を謝罪から始める傾向が見られ、この傾向については、猪崎(2000)を支持する結果となった。

以上のことから、開始(A)では、日本語母語話者は依頼を謝罪から始める傾向があり、さらに「言いさし」を使用して丁寧さを表して

いるが、学習者の場合、質問文と平叙文で依頼を開始する傾向があることがわかった。

前提(B)部

次に、具体的な依頼内容に入る前に、現状について説明し、依頼の前提を話す言語行動(説明)を行う。表1はそれぞれの母語話者に見られた発話である。

表1 母語話者別の前提(B)部の発話(説明)例

| | |
|-------|---------------------|
| 仏語 | 一週間みっかで働いていました |
| 西語 | 今までは一週間、さんにち働いていますね |
| 英語 | 今は三日間のバイトをしています |
| 中国語 | 私、今、さんにち、働いています |
| 日本語母語 | 今、週三日、入ってるんですけど... |

この前提(B)の部分で、学習者が前提の説明発話を行っているかどうかの割合を示したものが図2である。

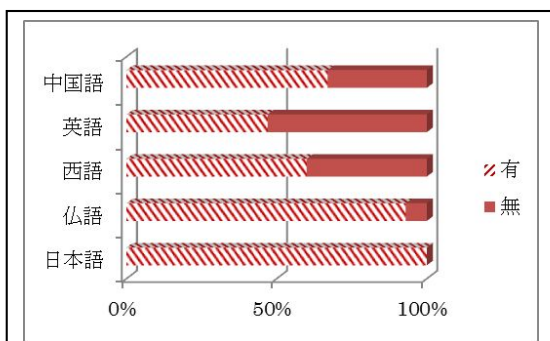


図2 前提(B)部の説明の有無の割合

図2から、日本語母語話者は、依頼に入る前に現状(現在のアルバイト日数が三日であること)について触れ、依頼の前提としているが、日本語学習者の場合は、フランス語話者以外は、必ずしもその傾向は見られず、「店長にお願いがありますが、ふつか、週に二日だけ働きたいんです(西・英・中)」といったように開始部から前提を省略して本題の依頼に入るケースが多く、唐突な依頼との印象を与える可能性がある。

依頼(C)部

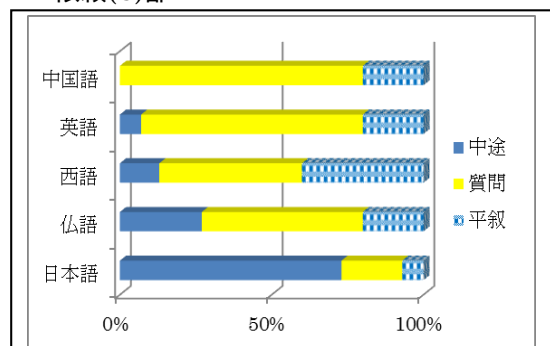


図3 依頼(C)部の発話文の種類割合

本題の依頼(C)部分について分析する。図3は、母語話者別の依頼でどのような種類の文が使用されているかを示した結果である。

図3の結果から、以下のことがわかる。

- 日本語母語話者は、「二日間にさせていただきたいんですが...」などの中途終了文が多いのに対し、学習者は母語の違いにかかわらず、「二日間にしていただけませんか」「二日はどうですか」などの質問文が多い。
- 学習者は、日本語母語話者に比べると「勉強が難しいなのでお願いします」「二日だけをできれば働きたいです」「二回だけで働いてさせてください」など、願望を述べる平叙文を使う割合が高い。
- また、学習者は丁寧な依頼を表す使役と授受表現「～させていただく」が使えないため、依頼の意図が伝わりにくい表現となっている例も多い。例えば、「私は三日の仕事はできませんですから、どうしましょう。どうすればいいですか」「二日間になってもいいですか」などでは、聞き手に強引な印象を与えてしまう可能性がある。

(5) おわりに

今回の研究から、4つの母語の学習者に大きな違いは認められず、以下の共通の傾向が見られた。

学習者は母語の違いにかかわらず、開始部や依頼部で「言いさし(中途終了)文」を使用していなかった。

学習者は前提部をとらない場合も多く、唐突な印象を与える。

母語話者は依頼する場面では、謝罪表現が多く、一方、学習者には謝罪する表現は少なく、質問文や平叙文を使って、交渉する表現を使っている。

学習者は「～させていただく」などの使役と授受表現を使った丁寧な表現を使用していない。

母語にかかわらず、共通の傾向が観察されたことは、必ずしも母語の影響を否定するものではないが、言語行動の別の要因の存在を暗示するものである。想定される要因は、日本語能力のレベルである。つまり、「言いさし(中途終了)文」や使役と授受表現「～させていただく」を使えるレベルに達していない場合は、母語の影響よりもレベルの影響が大きいと考えられるのではないだろうか。

さらに注意すべき点は、猪崎(2000)が指摘している意識の違いである。4カ国語の学習者が、このロールプレイの内容(アルバイトの日数の変更)を「依頼」とみなすか「交渉」とみなすかで必ずと表現は異なる。これらの意識については、学習者の母語で同じロールプレイ等を行って比較する必要があるだろう。

引用文献

1. 生駒知子・志村明彦 (1992) 英語から日本語へのプラグマティック・トランスファー―「断り」という発話行為について― 『日本語教育』 79号, pp. 41-49.
2. 猪崎保子 (2000) 「「依頼」会話にみられる『優先体系』の文化的相違と期待のずれ」 『日本語教育』 104号, pp. 79-87.
3. 鮫島重喜 (1998) 「コミュニケーションタスクにおける日本語学習者の定型表現・文末表現の習得過程―中国語話者の「依頼」「断り」「謝罪」―」 『日本語教育』 98号, pp. 73-84.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 4 件)

迫田久美子他, 「多言語母語の日本語学習者横断コーパス I-JAS」 『国語研プロジェクトレビュー』 第6巻, 3号, 査読無, 2016, pp. 93-110.
李在鎬, 迫田久美子他, 「テスト分析に基づく「SPOT」と「J-CAT」の比較」 『第二言語としての日本語の習得研究』 査読有 18号, 2015, pp. 53-69.

Irena Srdanović and Kumiko Sakoda, Analysis of Learner's Production of Adjectives Using the Japanese Language Learner's Corpus C-JAS: The Case of *takai*. Acta Linguistica Asiatica, Vo. 3, No. 2, 2014, pp. 9-24.

迫田久美子, 「日本語学習者のコミュニケーション 誤用の原因と運用のストラテジー」 『日本語教育と日本研究にかかわる双方向性アプローチの実践と可能性』 ココ出版, 査読無, pp. 21-32.

〔学会発表〕(計 4 件)

迫田久美子 「日本語学習者の『話すタスク』と『書くタスク』における言語使用の違い」 第79回日本心理学会, 2015年9月22日, 名古屋国際会議場(愛知県, 名古屋市)

迫田久美子, 招待講演「日本語指導に活かす学習者コーパス研究」 ホーチミン市日本語教育国際シンポジウム 2015年9月7日, ホーチミン(ベトナム)

田中真理, 迫田久美子, 野田尚史 「日本語学習者コーパスにおける対話 - ロールプレイ, メール, エッセイの分析をとおして - 」 第10回AJE大会, 2015年8月28日, ボルドー(フランス)

カオ・レ・ユン・チー, レ・ティ・ホン・ガー, 迫田久美子 「日本語の語彙習得における音節と語の転換現象 - ベトナム人日本語学習者の会話データに基づいて - 」 日本語教育国際研究大会 ICJLE 2014年7月12日, シドニー(オーストラリア)

〔図書〕(計 3 件)

Sakoda, Kumiko, Mouton de Gruyter, "Errors and learning strategies by learners

of Japanese as a second language" In M. Minami (Ed.), Handbook of Japanese applied linguistics. Vol. 10, 2016, 535

Ozeki, Hiromi, Mouton de Gruyter, "Corpus-based second language acquisition research" In M. Minami (Ed.), Handbook of Japanese applied linguistics. Vol. 10, 2016, 535

野田尚史(編), 奥野由紀子, 迫田久美子他, くろしお出版, 『日本語教育のためのコミュニケーション研究』 2012, 223

〔その他〕ホームページとコーパス公開 『学習者コーパスに基づく第二言語としての日本語の習得研究』

<https://ninjal-sakoda.sakura.ne.jp/laj/>

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
迫田久美子 (SAKODA, Kumiko)
国立国語研究所・日本語教育研究情報センター・教授 研究者番号: 80284131
- (2) 研究分担者
岩立志津夫 (IWATATE, Shizuo)
日本女子大学・人間社会学部・教授
研究者番号: 80137885
- (3) 研究分担者
野田尚史 (NODA, Hisashi)
国立国語研究所・日本語教育研究情報センター・教授 研究者番号: 20144545
- (4) 研究分担者
田中真理 (TANAKA, Mari)
名古屋外国語大学・外国語学部・教授
研究者番号: 20217079
- (5) 研究分担者
松見法男 (MATSUMI, Norio)
広島大学・教育学研究科・教授
研究者番号: 40263652
- (6) 研究分担者
金田智子 (KANEDA, Tomoko)
学習院大学・文学部・教授
研究者番号: 50304457
- (7) 研究分担者
大関浩美 (OZEKI, Hiromi)
麗澤大学・外国語学部・准教授
研究者番号: 50401584
- (8) 研究分担者
奥野由紀子 (OKUNO, Yukiko)
首都大学東京・人文科学研究科・准教授
研究者番号: 80361880
- (9) 研究分担者
峯布由紀 (MINE, Fuyuki)
上智大学・言語教育研究センター・准教授
研究者番号: 00508509
- (10) 研究分担者
李在鎬 (LEE, Jae-Ho)
筑波大学・人文社会科学研究科・准教授
研究者番号: 20450695